

ロックの生得説批判について

春日 亮佑

はじめに

ロックは『人間知性論』(以下、『知性論』)第1巻で生得説批判を行った。これに対し、『知性論』の第1巻は生得説の否定という、消極的な議論に終始していると捉えられてきた¹。しかし、『知性論』第1巻でなされている議論は、単に『知性論』における一消極的議論に留まるのではなく、彼の思想全体に通底する重要な位置づけを占めている。本稿では、ロックの生得説批判の内実とその位置づけについて考察し、ロックの著作間の統一的読解を行うための基盤となることを目指す。

第1節では、まずロックの生得説批判の内実を明らかにするための下準備として、まず論敵となる生得説の定式化を試みる。すなわち、生得説がどういう説で、誰によって何のために唱えられた説なのかということについて、具体的に見ていく。第2節ではこれらを踏まえ、彼の時代に主張されていた2種類の生得説、「素朴な生得説」と「性向生得説」について、ロック自身がどのように批判しているのか見ていくことで、彼の反生得説の内実を解明する。結果、彼が性向生得論者と同じように、性向や能力の生得性は認めていたことがわかる。第3節では、同時代の性向生得論者であるケンブリッジ・プラトニストたちとロックの立場の差異について検討する。結果、モアとは想起説を採らない点で、カドワースとは観念の源泉に関する点で異なることが明らかになる。最後に、第4節では1690年以前の著作における生得説をめぐるロックの記述を検討することで、ロックの思想内の位置づけを確認する。その結果、彼が『知性論』出版以前から一貫して反生得説を採っていたことが示される。

1. 生得説について

本節ではロックの論敵となる生得説を定式化するため、まずはその対象、すなわち何についての生得説であるのかということを示した上で、それが誰によって何の目的で唱えられたのか、ということについて見ていく。

1. 1 生得説の対象

生得説とは何らかの観念ないし知識(命題)が我々に生得的に備わっているとする立場であるが、ロックが念頭に置いていたのはどちらなのか。観念とは我々の思考の対象となるイメージや概念である一方、知識はそれらを組み合わせて作られるものであるが、ロックが『知性論』第1巻で否定したのは両者である。このことからオ'Connorはロックが『知性論』第1巻で主眼に置いていたのは生得観念を否定することだったと述べているが(O'Connor 1967, 41)、そうではない。『知性論』第1巻全4章のうち、2章から4章までの章題は全て生得原理に関するものであるし、『知性論』で初めて生得観念について主題的に論じる際、以下のように述べているからである。

もし生得原理があると我々を説得する人々がそれらの原理を総体的にまとめてとりあげるのではなく、それらの命題が作られているところの諸部分を分離して考察したならば、彼らはおそらく諸原理が生得的であるとそれほど進んで信じなかっただろう。なぜなら、それらの真理を作り上げる諸観念が生得的でなければ、それらによって作り上げられた諸命題が生得的であること、すなわちそれらに関する我々の知識が生まれつき我々に備わっていることは、不可能だからである。

(E1.4.1)

ここでロックは知識を構成する観念が生得的でないならば、知識も生得的でないと述べている。そしてその後、生得的だと思われるそれぞれの観念について検討している。ならば、彼が生得的知識を斥けるために生得観念を否定したことは間違いないだろう。したがって、ロックの論敵となった生得説とは、知識の生得性を唱える説と理解すべきである。

1. 2 生得論者とその目的

では具体的に誰がどのような生得説を何のために唱えていたのか。これが明らかにされなければ、ロウが指摘しているように、ロックはかかしを攻撃していたことになるだろう(Lowe 2013, 23)。以下では、まず論理的に考えられる生得説について検討した上で、実際に誰がそのような説を唱えていたのか、ということについて見ていく。

本稿で扱う生得説とは何らかの知識が生得的であるという説であった。無論、全ての知識が生得的であるという立場も可能であるが、その場合は全ての知識が生得的でないという立場と言語上の用法以上の相違はないため、本稿では考察しない。では、何らかの知識が生得的であると唱える時、この説は何を意味するのか。それは、何ら

かの知識が命題化されて明確に心に印銘されているという生得的知識の顕在性を主張する立場と、我々が何らかの知識を獲得する性向ないし傾向性を持っており、後に経験を通じてそうした能力が発現し、ある種の知識を覚知するようになるという生得的知識の潜在性を主張する立場である。では、歴史的にはどうか。

ヨルトンによると、17世紀のイングランドで生得的知識の問題は広く議論されていた。生得説は信仰や道徳性の確保のために必要だと考えられていたからである (Yolton 1956, 29)^{2 3}。ロックの時代にイングランドで流布していた生得説はおよそ2つに分けられる。第一はカーペンターやスティリングフリート、サウスらによって唱えられた「素朴な生得説 (naïve form of the theory of innateness)」である。これは、自然法を知るためには神によって自然的良心が植えつけられていなければならないということから、我々はいかなる推論や経験の助けもなしに生得的知識を獲得するのであり、それらは単に普遍的同意によって示されると主張する立場である (Yolton 1956, 30-9)。これは、「神が存在する」という知識は全人類に生得的に植えつけられており、地域や経験と関係なしに普遍的に同意されることから、この知識を生得的だと主張する。この立場は、先ほどの生得的知識の顕在性を主張する立場として理解出来よう。

第二は、モアやカルヴァウエル、チャールトンらによって唱えられた「性向生得説 (the dispositional version of the theory)」である。これは、生得的知識は力能として我々の心の内に性向的にあり、経験によってこうした知識は顕在化するという立場である。モアやカルヴァウエルがある原理へ我々が直ちに同意することを根拠にしているように、この説は普遍的同意を根拠にするわけではない (Yolton 1956, 39-44)。これは、「神が存在する」という知識は外的な誘因を機会とし理性の正しい使用によって獲得されるのだが、こうした知識を得る能力は我々に生得的であると主張する。先ほどの生得的知識の潜在性を主張する立場として理解出来よう。

以上、生得説は知識に関する生得説であること、そしてそれは信仰や道徳性の確保のために唱えられ、普遍的同意を根拠に知識の顕在性を主張する素朴な生得説と知識を得る能力が生得的であることから知識の潜在性を主張する性向生得説の2つあったことがわかった。次に、ロックが実際にどのようにこれらを批判していたか検討することで、彼の主張を明らかにする。

2. 生得説批判の内実

本節では、ロックがどのような生得説を批判していたのかを明らかにすることで、彼の生得説批判の内実を明らかにする。ロックはまず、自身の生得説批判の方法を以

下のように述べる。

〔生得原理があるという想定の誤りを示すには〕いかに人間が、いかなる生得的な印象の助けもなしに、自身の自然な機能の単なる使用によって彼らの持つ全ての知識に到達しうるのか、そして〔生得説論者が言うような〕いかなる本原的な思念や原理なしに確実性に到着しうるのかさえ示せば十分であるだろう。(E1.2.1)

ロックは、我々が生得的な印象や原理がなくとも、現に有している全ての知識へと至ることが出来るということを示すことで、生得説を斥けられると考えていたのである。無論、こうしたロックの方法は論理的に生得説を斥けるものではない。第一に、ロックがいかに生得原理なしに我々が知識を獲得出来るか主張したところで、生得説側もまた自説に則った仕方では説明出来るからである。第二に、もし生得的にも後天的にも得られる知識があったならば、彼の説明は我々の知識の成立過程のある側面を表したものに過ぎなくなるからである。ロックのこうした所信表明は、生得的知識一般の可能性を論理的に排除するためになされたのではなく、寧ろ特定の生得説の問題を明らかにすることでその不要さを示すためになされたものと捉えるべきであろう。実際、彼はその後個々の生得説を吟味している。

では、ロックはどんな生得説を論敵として念頭に置いていたのか。このことを解明するため、前節で明らかにした、同時代に唱えられていた2つの生得説のそれぞれについてロックの批判を検討する。ロックが念頭に置いていた生得説を特定することは彼の生得説批判の内実を明らかにするために有効となるからである。先取りすれば、ロックが批判していたのは素朴な生得説であり、寧ろ彼自身、性向生得説に近い立場を採っていたことがわかる。まずは素朴な生得説について、『知性論』の記述から検討してみよう。

2. 1 素朴な生得説

素朴な生得説はいかにして主張されるのか。リックレスは以下のように定式化する。

- (1) もし全ての人がPに同意するなら、Pは生得的である。
- (2) 全ての人が同意するような思弁的原理や実践的原理がある。

ゆえに

- (3) 生得的な思弁的原理や実践的原理がある。(Rickless 2007, 45)

これに対し、ロックは以下のような形で反論を行っている。

- (4) もしある原理が普遍的に同意されるなら、その原理は生得的である。(E 1.2.2)
(5) いかなる原理も普遍的に同意されていない。(E 1.2.4)

ゆえに

- (6) いかなる原理も生得的でない。(E 1.2.4)

ロックは一旦 (1) を受け入れ、(2) を否定することで、結論 (3) を否定出来ると考えたのである。無論、これは論理的に正しくない。(4) と (5) から (6) は導出されないからである。もし普遍的に同意されない生得原理があるなら、この推論は成立しなくなる。生得原理を否定するために必要になるのは寧ろ、(4) の代わりに

- (7) もしある原理が生得的であるなら、それは普遍的に同意されている。

という前提である⁴。しかし、このことは逆説的にロックが念頭に置いていたのが素朴な生得説であったことを示していると捉えるべきではないか。ロックは後で実際に (7) を認めており (E 1.2.24)、単に論理的な間違いを犯したわけではないからである。ならば、ロックはここで、普遍的に同意されない生得原理があることを生得論者は主張しないだろうということを暗黙裡に前提していると理解すべきであろう。すなわち、ロックは生得説一般を否定するためではなく、ここで普遍的同意を根拠にする素朴な生得説を批判の際に念頭に置いていたために、(4) を一旦受け入れたのである。

2. 2 性向生得説

では性向生得説についてはどうか。ロックは、我々が理性の使用によっていくつかの諸原理を発見出来るということから生得説を主張する立場について、以下のように述べている。

しかし、もし理性というものが(彼らのことを信じるなら)ただ、既に知られた諸原理や諸命題から未知の真理を演繹する機能であるならば、いかにして理性

の使用が、生得的と想定される原理を発見するのに必要だと考えることが出来るのだろうか。我々が発見するのに理性を必要とする原理は、私が言ったように理性が我々に教える全ての確実な真理は生得的だと言わない限り、生得的だと考えられることが決して出来ない。(E 1.2.9)

ここでロックは、理性によって知られる原理が全て生得的だと言わない限り、理性の使用を生得説の根拠とすることは出来ないと述べている。しかし、そうであるなら理性が既に知られた生得の真理を見つけるということになり、その真理を知っていると同時に知らないことになるという点から明白に矛盾する(E 1.2.9)。このようにして、ロックは理性の使用によっていくつかの原理を発見出来ることから生得説を主張する立場を批判する。

ならば、彼は性向生得説も批判の対象として念頭に置いていたのか。そうではない。ここでロックが批判しているのは我々の能力が生得的だという立場ではなく、我々の能力を行使して得られる知識が生得的だと主張する立場である。実際、ロック自身、我々が知識を獲得するために何らかの性向を備えていることを認めている。

しかし、そうした知識の本有的印象や心に印銘された観念がなくとも、人間への神の善性は欠けているわけではなかった。なぜなら、神は我々のような存在者の目的にとって必要な事物の全てを発見するには十分に役立つだけの諸機能を人間に与えたからである。そして私は疑わないが、人間は彼の自然な能力の正しい使用によって、いかなる生得原理もなしに神や神に関する他の事柄の知識に到達しうることは示されるのである。(E 1.4.12)

ロックは生得原理を否定する一方で、我々が知識を獲得するための何らかの生得的な機能や性向を持っていると主張しているのである。こうした記述は『知性論』の他の箇所でも見られる。

私は告白するが、自然は人間に幸福への欲求と不幸の忌避を備えた。これらは、実際には(実践的原理では当然であるが)我々の全ての行為に対して止むことなく、恒常的に作用し影響を及ぼし続けるような生得的な実践的原理なのである。(E 1.3.3)

ここでのロックの記述は一見、生得的な実践的原理を認めているように思われるがそ

うではない。同じ節において彼はすぐさま次のように述べているからである。

これらのこと〔自然が人間に幸福への欲求と不幸の忌避を備えたこと〕は、全ての人そして全ての時代において一様に、そして普遍的に観察されうる。しかし、これらの傾向性は善への欲求なのであって知性への真理の印象ではない。私はこれらが人間の心に印銘された自然の傾性であることを否定しない。(E 1.3.3)

幸福への欲求や不幸の忌避は我々に傾向性として備わっているが、それは知性への真理の印銘ではないのである。ならば、先ほど彼が生得的な実践的原理と認めた幸福への欲求を文字通りに受け取ってはならないことがわかるだろう。ここで彼は生得的な概念や知識を認めているのではなく、我々は「結局、善とは何なのかと問わずにはいられない、という事態」(一ノ瀬 1997, 49)を記述しているのである。

他の実践的原理について述べている箇所を参照すれば、ロックが『知性論』第1巻3章3節で生得的な知識を認めたわけではないことが、より明らかになる。たとえば、彼は「人は自分がしてもらいたいように振る舞うべきである」という黄金律の生得性を批判している(E 1.3.4)。この原理は徳の内実についての原理であり、この点で文字通りの実践的な原理であろう。しかるに、前述の「幸福への欲求や不幸の忌避」というのは、黄金律と異なり、幸福や徳の内実について何ら言及していない。実践的原理が規範的である以上、幸福や徳などについて何らかの内容を含んでいなければならない。したがって、「幸福への欲求や不幸の忌避」は文字通りの実践的原理たりえない。無論、ある能力を持っているということと、それが生得的であるということとは異なる。我々は、車を運転する能力は生得的でなく、経験によって得られる能力だと言うことも出来よう。しかし、ロックは幸福を欲求したり不幸を忌避したりする能力が「人間の心に印銘された自然の傾性」であり、「感覚と知覚の最初の瞬間」から備わっていると述べている(E 1.3.3)。ならば、彼自身は我々に知識を獲得するために何らかの生得的な能力や性向があると考えていたことがわかるだろう。

では、なぜ彼はこうした能力を思わず生得的な実践的原理と言ったのか。この背景には、実践的原理という語の多義性が潜んでいるように思われる。OEDによると、「実践的 (Practical)」という語には「思弁や理論に対して、実践や行為に関係する」という意味があり、彼が「実践的」という言葉をどちらの場合にもこの意味で用いていることは明らかだろう。問題は「原理 (Principle)」の方にある。「原理」という語には「他の命題や真理の基礎となる命題や真理」と「本原的、或いは生まれつきの傾性や機能。自然で生得的な性向」の意味があり、彼は生得説批判を行う時には前者の意味で、そ

して性向という意味での生得的な実践的原理を認めた時には後者の意味で用いていた。この『知性論』第1巻3章3節から我々が読み取らねばならないのは寧ろ、彼は命題化された生得的知識を認めていなかった一方で、生得的な性向を認めていたという事態なのである。ならば、ロックの性向生得説への態度が明らかになる。彼は性向生得説同様、知識を獲得するための性向を生得的と認めていたのである。

以上、ロックの時代に唱えられていた生得説を彼の『知性論』での記述に照らし合わせて考察することで、生得説批判の内実を明らかにした。それは、我々が何らかの推論や経験の助けなしに生得的知識を持っているという立場に対して向けられた批判であり、我々が知識獲得のための何らかの性向や機能を生得的に持っていることに対する批判ではない。換言すれば、生得説を批判しながらロック自身もある種の生得説を採っていたのである⁵。とはいえ、ロックが他の性向生得論者(主にケンブリッジ・プラトニストたち)と全く同じ主張をしていたかと言えば、そうではない。次節では、両者の差異について見てみよう。

3. ロックとケンブリッジ・プラトニスト

ロックは従来の性向生得論者とどれほど異なるのか。この点について検討するため、まずは性向生得論者の代表であるモアの議論について見てみよう。モアは『無神論への対抗』で現実的知識(actual Knowledge)を我々が心に抱いている、と言う際に以下のように述べている。

私が現実的知識と言う時、私は我々の外的視覚にとって大空にたくさんのトーチや星があるように、知覚機能にとって目立ったり光ったりするような一定数の観念がある、とは言っていない。[...] 私がそれに関して理解するのは、心の中の活動的な聡明さ、或いはそうであった通りの想起であり、それによってもし最小限の労力で手がかりを与えられたなら、直ちにより明晰で偉大な把握へと至るのである。(More 1653, 13 in Yolton 1956, 40)

ここでモアは、現実的知識を明晰判明なものとしてではなく、心が想起することで得られる潜在的な知識である、と言っている。その上で、心の中の生得観念の形成を、はじめの2、3語を聞くだけでその歌の全体が想起されることと比較し、次のように述べる。「外的な対象の衝撃によって呼び起こされた人の心は、外的な機会からただ不完全な手がかりを与えられたものから、より十全で明晰な把握へと引き起こされるので

ある」(More 1653, 14 in Yolton 1956, 40)。すなわち、人は外的に触発されることで想起されるような観念を持っているということである。そしてモアはこうした観念を道徳的、数学的、論理的知識の基礎に位置づけた⁶。

また、同じくケンブリッジ・プラトニストとして挙げられるカドワースは、「外的な可感的対象から心に印銘されたわけではない観念がいくつか心にあること、それゆえそれらは心自体の生得的な力や活動から生起しなければならないことは明白である」(EIM 4.2.1)と述べている⁷。カドワースはいくつかの観念は生得的な能力によって得られる、と考えていたのである。

では、ロックはモアやカドワースとどう異なるのか。まずはモアと比べてみよう。ロックは観念を「およそ人間が考える際の知性の対象」、「心象、思念、形象の意味する一切、すなわち人間が思考する際に心が携わることの出来る一切」(E 1.1.8)と定義する。そして、思考には常に意識が伴う(E 2.1.11)。ならば、意識されない観念を持つことは出来ないだろう。現に意識していない観念について、その観念を保有しているとは言えないからである。「ある思念が心に印銘されていると言う一方で、同時に心がその思念について無知でそれを覚知したことがないと言うことは、この印銘を無にする」(E 1.2.5)。したがって、ロックにとって外的な対象に触発される以前の現に知覚されていない観念は保持されておらず、生得観念たりえない⁸。

一方、カドワースはいくつかの観念は心の生得的な能力によって作られると述べている。知識や命題でなく、観念が心の能力によって作られる点に注目したのがアームストロングである。彼はまず、ロックが感覚なしに我々は観念を持つことが出来ないと述べていること(E 2.1.4-5)に注目し(Armstrong 1969, 195)、外的な対象によって我々の観念が引き起こされる(E 2.8.7)ことから、我々の心の能力が観念を引き起こすわけではない、と結論する(Armstrong 1969, 200)。すなわち、観念は心の能力によって作られるのではなく、外的な対象によって得られるという点でカドワースと異なるというわけである。アームストロングのこの議論は、問題があるように思われる。

たしかに複雑観念と異なり、単純観念は心がそれを自由に作ったり破壊したり出来ないが(E 2.2.2)、ロックはそうした観念を得るのは我々の心の能力によるとも述べているからである。

知覚は、心が我々の観念に対して行使する最初の機能であり、そのために我々が内省から得る初めての、最も単純な観念なのであって、なかには思考一般と呼ぶ人もいる。しかし、思考は正しくは英語では、心にある観念に関する作用の内、心が能動的であるような種類の作用を意味表示し、心は何らかの事物をある程度

まで優位的に注意して考察する。というのは、単なるなまの知覚(naked Perception)では、心はその大部分においてただ受動的なのであり、その知覚するものを知覚せずにはいられないのである。(E 2.9.1)

ここで、ロックは我々が持っている能力である知覚について、思考との対比を通じて受動的だと述べ、受動的な能力を認めている。そしてこの能力は、「彼が見たり聞いたり感じたり、或いは思考したりする際に」(E 2.9.2)我々が内省によって知りうる。すなわち、我々が感覚する際に行使している能力なのである。「自身の心に起こっていることを内省するものは、これを見逃すことは出来ない」(E 2.9.2)。ならば、我々の心の能力が観念を引き起こす際に行使されていないとするアームストロングはロックの「受動性」を捉えきれておらず、明白に間違っていると言わざるをえないだろう。

では、カドワースの生得説はロックとどのように異なるのか。この点はカドワースが関係の観念を感覚以外の仕方から得られる観念として認めている点に見て取ることが出来る。モアのようなプラトンの見解を採らないカドワースによると⁹、原因や結果、相似、等しさなどは一方を他方と比較する心の能動性によって獲得される観念である(EIM 4.2.1)。とりわけ、人工的、或いは機械的な事物の観念は、感覚からは決して由来せず、外的な事物から心に印銘されたわけでもないが、知的な把握を必要とする。たとえば、家や宮殿の観念は石やレンガ、モルタルなどの観念だけから構成されるのではなく、その本質や本質的な基盤(formal reason)は関係的(relative or schetical)な思念によって作られている(EIM 4.2.10)。それゆえ、カドワースは、心はタブラ・ラサではなく(TISU 3.640)、知性(intellect)は「自身の内に書かれた文字を読む」(TISU 3.566)と、ある種の生得説を示唆する言明を行う。

一方で、ロックは感覚と内省による観察以外に観念獲得の方法を認めない(E 2.1.2)。これは『知性論』全体でも徹底されており、関係について以下のように述べている。

たとえ関係は事物の実在的本質に含まれていなくても、それは何か異質で何かを新たに引き起こす。しかし、関係的な語が意味する観念は通常は、それらが属する実体の観念よりも明晰で判明である。(E 2.25.8)

ロックはここでカドワースと異なり、関係を実在的本質に含まれていないものと見做した上で、実体よりも明晰判明に知覚される観念だと述べている¹⁰。そうして、彼は関係の観念について「関係は全て、私が我々の全ての知識の全材料と考えるところの感覚か内省の単純観念に終結し、そしてそれらに関わる」と述べる(E 2.25.9)。やはり、

ロックは一貫して関係を感じ或いは内省から得られる観念と捉えている。彼にとって、全ての観念の源泉は、たとえそれが知性の働きを必要としていても、感覚と内省にあるのである。

以上、性向生得論者とロック自身の議論の差異に注目した。ロックは意識されない観念を認めない点でモアと、感覚と内省以外に観念の源泉を認めない点でカドワースと異なるのである。では、ロックはいつから素朴な生得説を批判し、性向生得説を採っていたのか。最後に、『知性論』以前の著作について検討したい。というのも、本稿では十分に論じることが出来ない点ではあるが、ロックにおける生得説批判の位置づけを明らかにしてその一貫性を示すことは、ヴォーンが指摘する『統治論』の記述 (IT 2.11) との不整合を解決する手がかりとなるからである (Vaughan 1925, 163) ¹¹。

4. 『知性論』以前の生得説批判

本節では、1690年以前に書かれたロックの著作である『自然法論』、そして『知性論草稿』における生得説に関する記述について確認することで、『知性論』で生得説批判を行うまでのロックの思想の過程について検討する。

『知性論』出版の25年ほど前に書かれた『自然法論』で、次のような臆見について論じている。

この自然法は我々の内に生まれつき備わっており、そのように全ての心に自然によって植えつけられているので、こうした生得の文字や心に刻み込まれた義務の印を持っていないような心を持ってこの世に生まれた人や、導きの道徳的な知覚対象や道徳規則を思想の内に持っていない人は1人もいないといった臆見を持ついくつかの人がいる。(ELN 125-7)

ここで、ロックは自然法について素朴な生得説を採る人々について検討している。これに対して彼は、差し当たり以下のように回答する。

もし人が、自然が彼に備えつけた理性や生得的な機能を適切に使用したなら、彼の義務について指示するいかなる教師やそれらについて思い出させてくれるいかなる監督者もなしに、彼はこの法についての知識に到達出来るということを示せば十分である。(ELN 127)

ここでロックは我々の生得的な能力を適切に使用することで自然法についての知識を得ることが出来ると考えている。『自然法論』において既に性向生得説の立場を採りつつも、素朴な生得説を斥けようとしていたことがわかるだろう。『自然法論』第3論文でロックは自然法が生得的であるかどうかについて、より詳しく論じる。

もしこの自然法が人類全体の心に生まれた時から自然によって印銘されているならば、その法が心に備えつけられている人類が、その法についてなぜ全ての人が直ちに、ためらいなく同意し、進んでそれに従おうとしないのか。(ELN 137)

ロックはここで、全員に同意されるような法がない、ということを生得説批判の根拠の1つとして挙げているが、これは普遍的同意がないことを反生得説の証左として『知性論』で挙げていることを思い起こさせる議論であろう(E 1.2.24)。また、『知性論』で子供や知的障害を患う人が最も基本的だと思われる知識を持っていないと論じているのと同様に(E 1.2.5)、子供や文盲の人は自然法の知識を持っていないと論じている(ELN 139-41)。さらに、思弁的原理や実践的原理が印銘されていないことも示唆している(ELN 145)。

1671年に書かれた『知性論草稿』でも「私は人々の心の内に、いくつかの生得原理や第一思念、共通思念、いくつかの文字が、あたかも人の心に印銘されているかのように、この世に生まれた時から存在するということが、一般的に受容された臆見だと見出した」(DE.B 4)と述べ、自然法だけに限定されない生得説批判を行っている。また、『知性論』同様に神は我々に生得原理を印銘しなかったが、我々の目的に役立つだけの機能を備えつけたと論じている(DE.B 12)。

以上を踏まえるなら、ロックの生得説批判は『自然法論』執筆時には芽生えており、発展を遂げて『知性論』第1巻に至ったと考えられよう。ならば、『統治論』におけるロックの記述は異なる眼目で書かれたものとして捉えるべきではないのか。本稿では『統治論』での記述について詳しく言及することは出来ないため、『統治論』との整合性について具体的に検討することが今後の研究の課題となるが、1690年以前の著作におけるロックのこうした一貫性は、生得説批判が彼の思想に通底する重要な位置づけを占めていることの証となるだろう。

* 本稿は、科学研究費補助金(特別研究員奨励費)による研究成果の一部である。

¹ たとえば、ライルはロックの生得説批判を「彼は観念の生得説を最終の戦術的的目的のためではなく、暫定的な戦術的的目的のために批判した。私自身は彼がこの説を斥けるためにあまりに多くのペー

ジを割きすぎたと思う」(Ryle [1965] 2009, 155) と評している。

² Cf. Armstrong 1969, 187; Greenlee 1972, 254; Rogers 1979, 199.

³ アームストロングによると、実験科学の台頭で道徳や信仰を破壊する恐れがあると当時考えられたために生得説を採ったが、それだけでなく、バロウのように合理的思考についての公理の基盤としても生得説を用いようとした人もいた (Armstrong 1969, 190-1)。

⁴ Cf. Lowe 2013, 24-5.

⁵ ヨルトンはこうした事態を「ロックが誰をその本『『知性論』第1巻』で批判していたかと問うことは、パーカーやバーソージ、モア、カルヴァウエルが誰を批判していたかと問うのと同じである」(Yolton 1956, 48) と描写している。また、マシヤム夫人も 1688 年 4 月 7 日のロックとの手紙で、モアやカドワースとの差異がわからないと述べている (C 1040)。もっとも、ロックはこの質問に少なくとも書簡上では答えていない (C 1322)。

⁶ Cf. Reid 2012, 29.

⁷ リックレスによると、カドワースの『永遠不動の道徳性に関する論考』が公刊されたのは 1731 年であるが、ロックはその内容について知っていた (Rickless 2007, 41n10)。

⁸ モアの採るようなプラトンの観念とロックが念頭に置いていた生得観念とが異なることについて、パークリが『サイリス』で指摘している (Si 309)。

⁹ Cf. Allen 2013, 336.

¹⁰ 他にも、ロックの論敵として知られるスティリングフリートは、ロックとの書簡のなかで実体の観念は感覚と内省のみによって得られるものではなく、その合理的な観念は我々の心の内の最初の観念である、と批判する (Stillingfleet [1697] 2000, 14)。

¹¹ 「カインは誰もが犯罪者を滅ぼす権利を持っていると大変十分に信じていたので、彼の弟を殺した後、私を見つける者は誰でも私を殺すだろう、と泣き叫んだ。このことは、はっきりと全ての人類の胸の内に書かれている (writ in the Hearts of all Mankind)」(TT 2.11)。

[参考文献]

- Allen, Keith. 2013. "Ideas," in *The Oxford Handbook of British Philosophy in the Seventeenth Century*, Peter R. Anstey (ed.), Oxford University Press, 329-48.
- Armstrong, Robert L. 1969. "Cambridge Platonists and Locke on Innate Ideas," *Journal of the History of Ideas*, 30 (2), 187-202.
- Berkeley, George. [1744] 1953. *Siris*. in *The Works of George Berkeley*, Thomas E. Jessop (ed.), vol. 5, Thomas Nelson, 1953. (Si)
- Cudworth, Ralph. [1678] 1845. *The True Intellectual System of the Universe*, 3 vols. Thomas Tegg. (TISU)
- . [1731] 1996. *A Treatise Concerning Eternal and Immutable Morality with a Treatise of Free Will*, Sarah Hutton (ed.), Cambridge University Press. (EIM)
- Greenlee, Douglas. 1972. "Locke and the Controversy over Innate Ideas," *Journal of the History of Ideas*, 33 (2), 251-64.
- 一ノ瀬正樹. 1997. 『人格知識論の生成——ジョン・ロックの瞬間』, 東京大学出版会.
- Locke, John. [1690] 1975. *An Essay concerning Human Understanding*, Peter H. Nidditch (ed.), Oxford University Press. (E)
- . [1690] 1960. *Two Treatises of Government*, Peter Laslett (ed.), Cambridge University Press. (TT)
- . 1954. *Essays on the Law of Nature and Associated Writings*, Wolfgang von Leyden (ed.), Oxford University Press. (ELN)
- . 1976-89. *The Correspondence of John Locke*, Esmond S. de Beer (ed.), 8 vols. Oxford University Press. (C)
- . 1990. *Drafts for the Essay Concerning Human Understanding and Other Philosophical Writings*, Peter H. Nidditch & G. A. John Rogers (eds.), Oxford University Press. (DE)
- Lowe, Jonathan E. 2013. *Locke's Essay Concerning Human Understanding*, 2nd edition, Routledge.
- O'Connor, Daniel J. 1967. *John Locke*, Dover Publications.
- Rickless, Samuel C. 2007. "Locke's Polemic against Nativism," in *The Cambridge Companion to Locke's "Essay Concerning Human Understanding"*, Lex Newman (ed.), Cambridge University Press, 33-66.
- Reid, Jasper. 2012. *The Metaphysics of Henry More*, Springer.
- Rogers, John G. A. 1979. "Locke, Newton, and the Cambridge Platonists on Innate Ideas," *Journal of the History*

of Ideas, 40 (2), 191-205.

Ryle, Gilbert. [1965] 2009. "John Locke," in *Critical Essays*, Routledge, 154–64.

Stillingfleet, Edward. [1697] 2000. *The Bishop of Worcester's Answer to Mr. Locke's Letter; Concerning Some Passages Relating to His Essay of Humane Understanding*, in *The Philosophy of Edward Stillingfleet*, G. A. John Rogers (ed.), vol. 5, Thoemmes Press.

Vaughan, Charles E. 1925. *Studies in the History of Political Philosophy Before and After Rousseau*, Andrew G. Little (ed.), vol. 1, Manchester University Press.

Volton, John W. 1956. *John Locke and the Way of Ideas*, Oxford University Press.